

## 旅があなたに与えるもの

旅行作家

杉田 房子

本総会でお話する機会をお与えいただきありがとうございます。日ごろ看護という大事なお仕事をなさっていらっしゃる皆様に、今日は私が看護役として、おくつろぎいただきたいと思います。

世界の国々の美しい風景、料理、女性の姿など、スライドでごらんいただきながら、お話をお聞き下さい。最初、スライドは、お話のバックグラウンド・ミュージックのつもりでございましたが、「どこかしら」「なにかしら」と当然お考えになるスライドもあると思いますので、一応スライドにそってすすめます。

旅——日常の生活から旅に出ますと、気分が軽く爽やかになります。未知なるものへの憧れと、発見と、出会い。「アラ！」「マア！」の連続がよるこびを与えてくれます。旅に出ると、よく歩きます。土地の名物料理との出会いもあって、三度の食事もキッチンととり、健康的な日々。

私の好きなところは沢山ありますが、その中でも好きなのは南太平洋。いまスクリーンに登場しているのがそれ。最後の楽園と呼ばれるフレンチ・ポリネシアには、タヒチ、ボラボラ、ランギロワなど魅力的な島々が点在します。紺青の海、サンゴ礁に囲まれ、ラグーン（礁湖）は波もなく熱帯魚の泳ぐのが見える明るい海。一年中花が咲き続けるいい香りの白い花ティアナ・タヒチ（タヒチの花）をはじめ、目のさめるような真赤なブーゲンビリアの花など、美しい海、美しい花々に囲まれた南海の生活は本当に素晴らしい。夜、海につき出たコテージのベランダにつけられた灯が、海中に光の輪を描き、そこに沢山の魚が寄ってきます。夕方は小さな熱帯魚から夜も更けるにしたがい“大物”が出現してきます。サメが三角の背ビレをナイフのよ

うにすうっと海面を切ってやってきたり、黒マントをヒラヒラさせるようにエイが灯の輪の中を舞を見せてくれます。そよそよとヤシの葉をそよがす心地よい風に吹かれ、満天の星をおおぎ、海中の女王の舞はどんなショーよりも心を奪われます。

このような島にいれば、慌てることなどなにもないわけですが、他の島とを結ぶ飛行機の出発時間がやけに早い便があるのです。タヒチアンダンスに魚の舞に、しかも心地よい夜風は、早寝など決して出来ません。そこでホテルのフロントにモーニングコールをお願いするのが安心、と思うのですが、これがまったく頼りになりません。早く目覚めてかろうじて間に合ったものの、フロントのタヒチ美人に文句をいいましたら、ニコッとするという返事がスゴイじゃありませんか。

「今日がダメなら、明日にしたら！」

たしかにその通りには違いありません。南海の孤島にいれば、今日の次に明日が朝の太陽と共にやってきます。なんでそうバタバタするのかしら……という顔さえされてしまいます。日頃の生活をふりかえり、ポリネシア風に物を見る方法を教えられました。

“旅は師”で、旅から教えられることは本当に多いですねぇ。

次はソ連。常夏の島から一転、真冬のソ連に話は跳びます。新潟空港からたった2時間のフライトでシベリアのハバロフスクに到着します。シベリアは遠い遠い国と思っていたのに、実際に飛んでみますと、ア然とする近さ。12月末のハバロフスクやイルクーツクは-30℃という寒さ。防寒服でも5分と屋外に立ってられません。服の上から寒さが針のように刺します。その中で、物不足のため買物をしようとすれば行

列。品物の溢れている日本では想像もつきませんが、この旅で私は「もったいない」という言葉が復活し、帰国後はやたらと「もったいない」と言うようになりました。自動車のタイヤは雪道でも普通のタイヤ。スノータイヤはない。野菜サラダは、小さな皿にほんの少し、それも日本だったら捨てるようなところ。ボルシチの野菜もほんの少ししか入っていません。自分の庭でも野菜ができる夏だったら、様子は違っているかも知れませんが、雪に埋もれた日本の62倍の領土は、冬に見る顔が本当の素顔なのでしょう。

もう一つ驚いたのは、若いガイドの男性が「今年私の女の子が生まれました。子供にとり父親は大切な存在なので、出張はしません。夕方早く家に帰ります」という発言。ハバロフスクから始まった私の旅には、女性ガイドが2週間同行したというのに、若い男性が子供のために外泊しなければならぬ出張はしません、というのです。女性は夫がいても出張するというのに、男性は子供のために出張を拒否する。これがまかり通る不思議さ。日本のお父さんは、出張どころか単身赴任で子供から離れ、孤軍奮闘しているというのに。ソ連の経済がむずかしいのは、働き手のお父さんが仕事より子育ての方が大事と思うところにあり、日本の現状は働き手のお父さんたちによるところが多いのだ——と悟りました。

これらのことを知ったのも雪と寒さの中だから見えたので、花咲く夏の日でしたら暑い太陽にかくされて見えなかったかも知れません。寒さの国は、もっとも寒いときに訪れて本物の素顔が見えることをも悟りました。

次はアフリカの最南端、南アフリカの喜望峰にまいります。クルーガー国立公園は野生動物の宝庫で、象、キリン、チーター…等車の中からたっぷり動物にめぐり会えますが、ケープタウンの町からホーン岬にまいりますと、そこでもオストリッチ（ダチョウ）の親子をはじめ、亀や大きな猿なども目の前に現われます。欧米人に「どこに住みたいか」と質問すると「ケープタウンかバンクーバー」と答える人が多い。私は気候も良く、世界に咲く花の半分以上があるという南アの方がいいと思うし、寒くないのがいいです。

南アの最初の国造りをしたのはオランダ系の人たち。原住民との対立や、大変なご苦労をしましたが、それ

でも彼等は「文化的生活にワインは不可欠」として、ドイツから葡萄の苗を取り寄せ、ワインを造りました。ケープワインがそれで、大変美味。日本でも輸入して売り出しました。ケープタウンで飲むワインは安いので、輸出用も安く売ることができます。日本でも最初1本500円で売出したのに売れ行きがよくない。「日本は高くした方が売れる」とアドバイスした人がいて、それではと3倍の1,500円にしたらアツという間に売切れてしまったそうです。世界一の物価高に私たちは泣きますが、その原因をつくっている人たちがいるのも事実のようで、残念。

ケープワインと一緒につくるシャンペンがまた最高の味。「あなたは今アフリカ大陸の最南端に立っています。それを記念してシャンペンでお祝いをしましょう」。強風の吹きさすむ海岸で、冷えたシャンペングラスでいただいたシャンペンの美味なること、言葉もありません。遠い遠いアフリカの最南端に、喜望峰にきたのだ！ わが人生をもふりかえり、感激のシャンペンでした。これは南ア政府のご案内して下さった方のアイデアだったので、思いがけなかっただけに、今でもあのシーン、あの味は忘れられません。

来客をもてなすときの、アイデア、タイミングを教えていただいた旅でした。

ワインといえば地中海に浮かぶキプロス島が面白い。キプロスのワインは旧約聖書の中にも出てきますし、そもそも葡萄の木を持ち込んだのは「ノア方舟」のノアの孫と伝えられる由緒つき。その誇りにかけて、大昔からのオリジナル種だけをかたくに守っているからです。これはまさしく「本物のワイン」。あのローマ皇帝シーザーも愛飲し、割りない仲となったエジプトの女王クレオパトラになんと島をあげて“愛の贈り物”にしたそうです。だいたい、キプロスの名前自体、この島で生まれた愛の女神アフロディーテ（ローマ神話のビーナス）の別名キプリスからきている説があって、ワインこみの島ごとクレオパトラにプレゼントという話も、こうなると愛の島にまことにぴったりになってくるではありませんか。

四国の半分ほどの島に約70万の人口、そこを走る車の75%は日本車。TVも冷蔵庫も電気製品のほとんどが日本製。その対比は300対1。日本は1きり輸入していないので、貿易摩擦になりかねません。日本はもっ

## 旅があなたに与えるもの

とワインを買って下さい、観光にきて下さい—。300対1の数字をもっといい対比にするためには私たちはキプロス・ワインをもっと飲まなくてはならないのです。

キプロスのお隣りトルコは、トルコ系住民の住むキプロスの北半分をとってしまったので、キプロスではトルコの話はしない方がいいようです。しかし、トルコも面白い国で、「日露戦争以来日本と仲良し」とトルコ人はいます。ロシアからいじめられていたトルコは、小さな国でありながら大きなロシアを敗った日本を尊敬し、偉大なる指導者ケマル・パシヤは日本の明治維新を学んで新生トルコをつくりました。

秋に庭で実をつける柿が、トルコにもありました。

やはり“カキ”と呼ばれます。日本から持っていった柿の木が根付いて、増えたもの。日本と同じように、温泉が沢山あって、日本人と共通するところが多いトルコ。日本を尊敬してくれる国の存在は、しっかりしなければ……と今の日本を考えさせられます。

旅に出られるのは、本人の健康と家族の条件が良くなければなりません。経済的余裕もなければいけません、人との出会いは前向きの人生、そして豊かさを与えてくれます。おいしいものに出合ったら、遠慮なく食べる幸を味して下さい。「今日食べ過ぎたら、明日食べなければいい」と世界の女性たち誰もがいうセリフです。“天気”と“元気”で旅に出かけて下さい。